



日本戦闘の開拓者



荒谷 頂（あらや たかし）

生年月日：昭和34年秋田県出身

略歴：昭和57年東京理科大卒、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依頼退職（1等陸佐）。

海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。

平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。

平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会・熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める

著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精銳部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの「異端」自衛官—人は何のために戦うのか！』ワニプラス

熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス

<https://musubinosato.jp/>

最近は、移民政策にしても、税政にしても、食料政策にしても、健康保健政策にても、安保防衛政策にても、何から何まで国民が『まじか！』『嘘だろ！』『何考えてんだ！』という政策が次から次に実行され、日本の国が一気に衰弱していくのがよくわかるようになった。ここまでくると、戦後一貫して嘘の歴史、間違った価値観の教育を強要され、意図的に作られた偽情報で洗脳されてきた日本人も、さすがに『日本はおかしいぞ！』と気づいてきたようだ。少なくとも、日本の意思決定が、どうやら国民の意思とは無関係のところで決定されていることぐらいは誰でも分かるだろう。

第2次世界大戦後、イギリスのチャーチルが宣言した通り、「民主主義は終わり」「国家は退場し」「ごく限られたエリートによって世界は運営されるべき」時代に突入した。その最初の象徴的出来事がヤルタ会談だった。「これほど多くの人間の運命が、これほど僅かな人間によって決定されたためではない」という会談後のチャーチルの言葉にそれがはっきりと読み取れる。僅かな人間とは、英國首相ウインストン・チャーチル、米国大統領フランクリン・ルーズベルト、ソビエト連邦共産党書記長ヨシフ・スターリンの3人だ。この3人の合意によって、第2次世界大戦後の国境線の画定と世界の分担管理体制が決まったわけだ。しかし、ドイツと日本を倒すためにはソ連の力が不可欠だったが、戦争が終わると、用済みのソ連を排除するために冷戦構造を作り、その後、米英アングロサクソンによる世界支配へと移行する。日本では、世界支配というとユダヤ系金融資本がもっぱら取りざたされるが、そうしたユダヤ資本をうまく利用して英國を支配し、米国を乗っ取り、日本を含む世界に実態としての支配権構築を進めてきたのはアングロサクソンのエリートだよ。奴らの口癖は「Winner takes all（勝者がすべてを手にする）」「I am the law.（俺が法律だ）」「A honest man is stupid（正直者は馬鹿だ）」。そして、Gentle（穏やか）に人を騙し、略奪し、殺傷するGentlemanがアングロサクソンっていう奴らだ。自分がやった悪事はすべて人のせいにし、自分と同じことを他者や他国がやると猛然と批判し攻撃をするサイコパスだ。だから世界中の嫌われ者だ。

江戸時代までは、日本でも親英米派

なんていうのはほとんどいなかった。そりやそうだよな、日本人をサル扱いして無礼で傲慢、交渉は恫喝と脅迫しかしないんだからな。江戸時代の外交論について読んでみると面白いから紹介する。

1800年代初頭、松前奉行・羽太正養（はぶとまさやす）が、当時の幕府内での外交論議を詳細に書き記した『休明光記』という書物の中には次のように書いてある。『ロシアのような軍事超大国が信義を尽くして交易を乞うてゐるのに、わざわざ恥辱を与える戦端を開くなど愚の骨頂。ロシアと交易していれば、英米など凶暴な野蛮国が我が国を武力で制圧しようとしても手が出せない』。少し説明すると、当時、キリスト教による侵略を恐れた江戸幕府は鎖国政策をとり、清国、朝鮮、オランダ以外との国交を断絶していた。1808年、英國軍艦「フェートン」号が、長崎港に強行侵入、オランダ船を捜索し日本から物資を強要調達して勝手に立ち去るという「フェートン号事件」が発生し、その責任を取って長崎奉行が切腹をした。そうした英國の海賊行為がしばしば起きた時代、1792年、ロシアのラックスマンが、根室・松前來航した。幕府は、これに対して身構えた。しかし、ラックスマンは、日本漂流民の引き渡しと、日本との通商交渉を希望し、松前藩を経由して幕府に伝達しに来たのであった。主席老中松平定信は、鎖国政策を説明したうえで、ロシアに長崎に入港の信牌（許可証）を付与し、今後の交渉について両国とも和やかに合意形成をしてラックスマン一行は礼を尽くして帰国した。日本側に引き渡された日本の漂流民は、伊勢の商人大黒屋光太夫（だいこくやこうだゆう）ら3人だった。ラックスマンは、アリューシャン列島に漂着した「神昌丸」の沖船頭大黒屋光太夫らを助け、首都サンクトペテルブルグの皇帝エカテリーナ2世に謁見（えっけん）させて大黒屋光太夫らの帰国願いをかなえ、彼らを



江戸時代の船頭である大黒屋光太夫の漂流経路を示した地図。

オホーツクから船で根室まで連れてきてくれたのであった。しかし、松平定信の失脚により、この日露間の約束は反故になる。1804年、ロシア使節レザノフが、皇帝アレキサンドル1世の親書及び幕府がラックスマンに与えた信牌を持って長崎に来航したのだが、その時の老中土井利厚は、昌平坂学問所大学頭林述斎らの「礼節をもって交渉するべし」という意見を排除し、2年間無回答のまま長崎に待たせた上、通商全面拒否の懲勲無礼な対応で退去を命じた。これによって日露間で問題が生じ、その対処にあたったのが『休明光記』の著者である羽太正養であった。

また、幕末では、相も変わらず、無礼で強硬な態度で交渉をこじ押する米英に対し、ロシアのブチャーチンは、勘定奉行兼海防掛・川路聖謨（かわじとしあきら）と礼儀正しい交渉態度で応じ、互に好印象を持ちつつ日露和親条約を策定し、日露国境画定を確定した。これ以降、川路は親露政策を提倡することとなる。川路以外にも、幕末の主な親露反英米論者には、仙台藩校養賢堂教授・大槻磐渓（おおつきばんけい）、長崎勘定奉行・大澤豊後守、勘定吟味役・江戸川太郎左衛門、そして「日露同盟論」を提唱した橋本佐内（はしもとさな）などがいる。

福井藩主・松平春嶽（まつだいらしゅんがく）が目をかけた幕末の俊英・橋本佐内が三条実篤に宛てた書簡には「かの英國などは、きわめて粗暴剛強な気風を有し、我が国の防備手薄など



福井藩主・橋本佐内は医学に長け、松平春嶽の側近となり政治を学ぶ。幕政改革を訴えロシアとの同盟を提唱。後に安政の大獄で25歳の幕を閉じる。

ろを見つけ上陸を強行する暴挙に出ましよう。これを撃退できたとしても、国内の騒動に乗じて外国軍に内応する不届き者が出てこの上ない危機になります」とある。また、福井藩主・村田氏寿（むらたうじひさ）に宛てた書簡では「英國は将来、必ずや我が国に対してロシアを攻撃する先陣の役を頼んでくる」とことになったわけだ。

また、時間が進んだ現在、英國に代わり

米国が対露戦略のために日本領土を軍事拠点として利用している。まったく

橋本佐内の読み通りの最悪の道を日本は歩んでしまったわけだ。

話を戻すが、日露戦争後、それまで国交のパイプがなかった日本とロシアが直接対話する機会を得て、日露関係は急速に改善され、1916年には、大阪造幣局でロシア通貨を製造するまで関係が密接になった。同時に、もともと自國益のために日本を利用し、親日感など全くなかった英國は日本と敵対するようになる。余談になるが、戦後、ロシア革命に貢献したとして英雄視されている明石元二郎は、イギリス秘密情報部のスパイであるシドニー・ライリーの手に落ちてロシア革命に協力したのであって、日本にしてみればせっかく構築した日露関係を台無しにした國賊なのだ。現に、「黄色いサルの日本人は歐州に災いをもたらす」という黄禍論を歐州に吹聴し三国干渉で日本を追い詰めたドイツ皇帝ウェルヘルム2世も彼を絶賛している。

話を元に戻すが、日露戦争で英米ユダヤ資本から貸し付けられた巨額の債務に苦しんでいた日本においても、ようやく邪悪な意図を持つ英米アングロサクソンとそれを支援するユダヤ資本やフリー・メーンについて冷静に認識できるようになった。そして、奴らの植民地化政策から日本を守り、アジアを開拓すべきだという正論が日本中に広まった。それが、大東亜建設という世界で初めての脱欧米グローバリズムの動きとなる。戦前の日本政府及び日本国民の歴史観、国際情勢認識、そして日本人としての正義と価値観は、今の日本人とは比べ物にならないくらい優れていたんだぜ。そうした戦前までの日本人としての常識とその後の展開については次回話をするよ。



日本に来航したアメリカ海軍提督マシュー・ペリーを描いた錦絵。



江戸時代に描かれた「嘉永6年（1853）12月、長崎に至れり露人使節団」。ブチャーチンと思われる。



国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷卓